

未来への展望を描くことが、とても難しい時代だ。

かつては経済成長が社会の未来を拓く牽引役であった。技術力を高め、産業化を進めること。受験戦争を戦い抜いて偏差値の高い大学へ進学し、一流企業や公務員へと就職することで安定した幸福な人生を送れるといった夢や希望を語ることもできた。しかし現代にあっては、出産や子育て、老後をめぐる不安といった家族や肉親に起こる問題、居住地域やふるさとの自治力、活力の低下などの問題、仕事や人間関係のストレスから生まれる心の悩みやさまざまな「生きづらさ」の問題が多数生まれてきた。さらには南北間格差や地球環境などの国境を越える問題、民族・宗教にまつわる対立・紛争なども複雑で解決が難しい。

これら山積する問題からの「世直し」と「人助け」に取り組み、未来への展望を描くことが、世界中で求められている。政府や自治体などの行政セクターだけではなく、一市民から営利企業にまで至るあらゆる主体が解決に取り組んでいかねばならない時代が到来しているのだ。

本書のタイトルにある「ソーシャル・イノベーション」とは、こうした社会における諸問題を「放ってはおけない自分ごと」として、仲間と共に解決にあたろうとする営みのことを指すと考えている。言い換えれば「社会ごと」を「自分ごと」にし、その「自分ごと」から新しいカタチやウゴキをつくり出して新しい「社会ごと」の潮流をつくり出すことだ。そしてサブタイトルの「身近な社会問題」はまさに「放ってはおけない自分ごと」でもある。それらの問題は身近なところだけでは完結せず、地球上に生きる人類全体の普遍的な問題へとつながっている。そうしたソーシャル・イノベーションの営みに、できるだけたくさんの人が関心をもち、実践への一歩を踏み出してほしいというのが本書のねらいである。

本書が対象とする読者は、ソーシャル・イノベーションや社会的企業の当事者周辺や、その活動を実践現場や教育現場で学ぼうとする人々のみにとどまら

ない。ビジネスの第一線にある方、子育て真っ最中の方、リタイアして次の一歩を踏み出そうという方、そして「なにか自分が社会に役立つことを、新たに始めたい」という方、すでに「放ってはおけない自分ごと」がある方、さらにそれが生まれてきそうな方々みなさんに読んでいただきたいと考えている。本書はこうした実践や研究への入り口として、大学等での教育・研究活動と、社会起業家としての実践活動の双方を股にかける執筆者たちと共に書き上げたものだ。3つの部と30のトピックスの構成で、どこからでも読み始め／読みきることができ、何度も出入りできるような一冊になっている。

第Ⅰ部「ソーシャル・イノベーションの基本概念と研究動向」ではソーシャル・イノベーションとはいったい何かを中心に、その概念や取り組みの基本的な方法論、さらにはその営みを実践研究として取り組むことについて編著者の西村の論考によって構成している。

第Ⅱ部「ソーシャル・イノベーションが求められる分野」は社会のさまざまな領域における諸問題と、そこで求められているイノベーションについて、各執筆者の専門や経験、先行事例をもとに書き著した。

第Ⅲ部「ソーシャル・イノベーションを導くツールとスキル」は、各執筆者が自ら携わってきた取り組みの事例を中心に、その具体的展開について記している。

相互に関連が深いトピックスには、本文中で“(⇒2)”のように参照先を示している。また、巻末には各トピックスの参考文献や情報をまとめて紹介した。読者のみなさんには本書を入り口としてそれぞれ興味のある分野の扉を開き、ぜひさらなる情報、そして「現場」に触れていただきたい。また当然ながら、ソーシャル・イノベーションにまつわる議論や求められる分野、ツールやスキルは本書で取り上げた30のトピックスにとどまらない。本書のタイトル『ソーシャル・イノベーションが拓く世界』のとおり、まさにみなさんが私たち執筆者と共に新たな世界を拓いていく歩みを始めていかれることを願っている。

2014年10月

執筆者を代表して 西村 仁志